



# コラム Column

## 失敗学と安全・安心

高橋 祐一郎

失敗学は、通常の学問とは一風変わった特徴をもっている。

通常の学問では、そのとおりにやればうまくいく方法、すなわち、その分野における研究の成功例をもとにして、さらに研究を発展させていくといったコンセプトが一般的であろう。したがって、再現性を担保した既存の成果をもとに、新しい発見や理論構築をしていくことが高く評価される傾向にある。

一方、失敗学では、ヒューマンエラーを重視し、うまくいった方法ではなく、うまくいかなかった方法を学んで、ものごとの真の理解につなげよう、といったコンセプトを掲げている。内在している失敗の種を見つけだすため、時として構築済みのシステムに疑いを持つこともある。したがって、重大な失敗を引き起こしかねない要因を事前に発見したことや、失敗の教訓を他の人に伝達していくために有効な方策を提示したことなどが高く評価される。

さて、失敗学を勉強していると、同僚や知人からその内容について聞かれることがある。失敗学の源流が機械工学や設計学にあるため、農林水産の研究になじみがないこともあるのだろう。その場合、まずは上記のような説明をしたうえで、資料を紹介するが、大概はそこまで終わってしまう。おそらく相手は、巷間耳にした言葉について小職が携っていると聞いたので、ちょっとした興味や話の場つなぎに尋ねてみたという程度なのであろう。

ところが、中には鋭い質問がなされることもある。失敗学に接した初期のころは、そのたびに、自分の認識について改めて考えさせられたものであった。

今でも思い出すのは、「将来の事故や失敗を未然に防ごうという失敗学のコンセプトはわかるが、それがお前の研究している安全や安心の構築につなげることができるのか。失敗を引き起こしかねない問題点を潰したことをもって、安心してくれと言えるのか」という質問である。当時、その場で答えを返すことができなかった小職は、情けなさを感じつつ、改めて勉強し直した。すると、失敗学では、過去の失敗について、「（原因）があったので、（結果）となった」といった単純な図式で理解しようとするのではなく、「（原因）に対し、（人間の行動）があったので、（結果）となった」と捉え、なぜ起きたのかを着目すべきとしていることがわかった。安全と安心の関係をこれに当てはめてみれば、安心という「結果」は、安全という「原因」だけでなく、「適切な行動」がなければ生まれてこないのではないかと。逆に言えば、安全ということでは、不適切な行動をしてしまえば、不安を生むこともある。アセスメントによって安全を導き出したとしても、安心を生み出すためには適切なマネジメントとコミュニケーションが必要である、というリスク分析の基本について、改めて認識させられるとともに、先の質問に答えが詰まってしまったそれまでの小職は、「失敗から得られた知識を導入して安全性を高めれば、安心が生まれる。」といった安直な考えを持ちながら研究に携わっていたことに気づかされたのであった。

失敗学は、現状ではまだ学問として確立された状態にあるとはいえない。しかし、食の安全・安心のごとく、人の健康に関する科学的知見だけではなく、関係する人や組織の行動が大きく影響してしまう事柄に対しては、有効な分析結果を与えてくれるのではなからうか。